

よろずは

平成二五年

五月号

タイトルの「よろずは」は、「万葉」を訓読みしたものです。

万葉文化館 おすすめ万葉歌

かにかくに 物は思はじ
飛驒人の 打つ墨繩の
ただ一道に

万葉集 卷十一—二六四八 作者未詳

【意訳】

あれこれと物思いはするまい。

飛驒の人が打つ墨繩のように一筋に——。

どんなに潔く決断力のあるように見える人でも、本人にしてみれば、さまざまに迷いや葛藤を抱えているのかもしれない。この歌は、そんな人間の弱さを断ち切るように、一度思い決めた恋にあれこれと物思いはしない、と決意を表明した歌です。どんなに障害があってもこの恋を貫こう、という思いは、まるで「飛驒の人が打つ墨繩」のようにまっすぐ一筋だとあります。

墨繩とは、墨を含ませた細い繩のことで、墨糸ともいいます。墨壺とセットで使い、墨を含ませた糸をピンと張り渡して、指ではじいて材木や石などに直線を引く道具です。現代でも同じ原理の道具が使われています。

飛驒の人々は、木材加工技術に優れていることで知られていたようです。飛驒国が工人を一定期間都へ派遣したという記録は、八世紀初め頃からみられます。現代でも木工が盛んな地として知られる飛驒は、古代から匠の里であったようです。

【万葉古代学係】